

「頑張る」における構造と変化

川 岸 克 己

The Structure and Transition of “gambaru”

Katsumi KAWAGISHI

1. はじめに

1.1. 背景

私たちが日常的に使用する言葉に「頑張る」がある。位相的には広範な語彙である。地域的にも年齢的にも制限はない。自分にも他人に対しても使用することができる。しかも、自分を鼓舞する、人を激励する、いい言葉として一般的には理解されている。

しかし、最近、この「頑張る」に対する認識が揺らいでいる。あまりいい言葉ではないという認識が生まれている。はたして、「頑張る」はほんとうに自分を鼓舞しているのか、あるいは、「頑張れ」がほんとうに人を激励しているのか、という疑念である。

たとえば、スポーツ選手がこの「頑張る」という言葉に違和感を覚えている。オリンピック選手がその開催地に向かうさい、しばしば空港などでメディアにマイクを向けられ、大会にむけての意気込みやコンディションについて聞かれる。すると、彼らは、にこやかに「楽しんできます」といったようなことを口にする。こういったシーンを見たことがあるだろう。こういった場合、かつては「頑張ってきます」というのが常套句であった。彼らは、明らかに「頑張ります」あるいは「頑張ってきます」という言葉を口にすることを避けている。

また、「頑張る」は、鬱病など精神的に病んでいる人に決して掛けてはならない言葉であるともいわれている。インターネットで検索してみると、鬱病を病む人のブログなどに、鬱病の人に「がんばれ」は禁句だといわれているが、自分が鬱病になってみてそれが本当だとよくわかるというような記述があった。「頑張って」は、けっして歓迎されることのない言葉になっていた。

とはいえ、「頑張る」という言葉は、日常会話の、もはや挨拶語として位置づけられるくらい、軽やかに使われる存在である。裏を返せば、その日常語として使用されるほど、私たちの日常の認識のなかに、無意識のうちに存在しているということでもある。そして、私たちの認識を規定している。ここでは、そんな「頑張る」という言葉について検討し、「頑張る」を取り巻く今後について考察する。

1.2. 問題提起

まずは、「頑張る」とは、そもそもどのような意味を持つのかを確認したい。「頑張る」はもともどのような語だったかについては、2つの説がある。1つは、「眼張る」が語源であるとする説、もう1つは、「我に張る」が語源だとする説である。この2つの説を検討し、「頑張る」の

語源は何かについて考察する。

現在の「頑張る」の意味は、精一杯に自分の持てる力を発揮してものごとを成し遂げる、というような意味であるが、その意味が現代において、忌避されるその使用される状況との間で齟齬をきたしているという問題についても考察する。

本論は、上記2点について論じる。

1.3. 仮 説

本論における結論は、以下の通りである。

まず、「頑張る」の語源は、「眼張る」と「我に張る」とがあるが、後者の説を支持する。ただし、「我に張る」の助詞「に」は想定せず、「我張る」を語源と考える。

つぎに、「頑張る」には、今日2つの意味があり、両者を区別すべきであるという認識が生じていると結論する。

2. 「頑張る」の意味

2.1. 「頑張る」の語源

「頑張る」には、2つの語源説がある。「頑張る」の語源としてまず考えられるのが「眼張る」をその語源とする説である。「眼張る」は、古くは1700年代ころに遡ることができる。「目を見開いて、何かをじっと見て、意識をそこに集中する」といったニュアンスである。洒落本・根柄異軒之伝（1780）では、「大道をがんばって、かな釘一本でも落ちて居る物を拾ふ」とあるが、これは、何かを探そうと一生懸命に目を見開いて、意識を集中させている様子を表している。

そのじっと見つめ、意識をそこに集中させている状態を傍らから見ると、ひとつの場所にじっとしているという状況であることが多いことから、「眼張る」は、「一カ所にじっとして動かない」という意味に変化したと解釈される。

また、浄瑠璃・軍法富士見西行（1745）「目が見えずば声を眼ばって置いて下んせ」や、歌舞伎・高麗大和皇白浪（1809）『『頭、金の在所を』『頑張って置かっしゃったか』』などのように、「～置く」という補助動詞と共に起する傾向にあった。これは、ある状態がそのまま継続することを表すか、あるいは、事前にその状態が生起してそれが継続するという意味であることを表している。となると、「眼張る」は、早くから、ある一定状態が継続するというニュアンスを持っていたことがわかる。

そして、その「ある一定状態が継続する」というニュアンスから、困難をはねのけて、我慢して何ごとかをやりとげる、といった意味へと変化したと考えられる。これが「眼張る」を語源とする考え方である。まとめると、以下のような変化を遂げたことになる。

①目を見開いて、何かをじっと見て、意識をそこに集中する。

↓

②ある一定状態を継続する。

↓

③困難をはねのけ、我慢してやりとおす。

一方、「頑張る」の語源を「我に張る」であるとする説がある。この、もう一方の頑張るの語源に対する考え方は、こうである。自分の気持ちや考え（我意）をどこまでも持ち続けることから、「我（に）張る」という語が生成され、そこから自分の考えを持ち、困難に打ち勝って、事を成し遂げる、というように、その意味を変化拡張させたものが今日の「頑張る」であるとしている。まとめると、以下のようになる。

①自分の気持ちや考えをどこまでも持ち続ける。

↓

②自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、困難に打ち勝って、事を成し遂げる。

両者とも、しかるべき説明が可能であり、いずれとも決め難いものがある。よって、意味の微妙な変化だけではなく、その他の事実からも検討してみる必要がある。

2.2. 「頑張る」の方言

「頑張る」という語、あるいは「頑張る」という意味の語は、地域によって異なる。つまり、方言が存在する。佐藤亮一監修『標準語引き日本方言辞典』（小学館）にあげられている用例をみると、「～張る（ばる・ぱる）」といった語構成をとる場合が多い。

「がんばる【頑張】」の方言例（括弧内は主な使用地域）

- 01) いきずみへんばる（島根）[へ+張る]
- 02) いきずりへんばる（島根）[へ+張る]
- 03) いしばる（神奈川）[(不明)+張る]
- 04) がしゃばる（長崎）[我(?) +張る]
- 05) がばる（秋田）[我+張る]
- 06) がまん（東京）
- 07) ぎばっ（佐賀）[気+張る]
- 08) ぎばむ（島根）[気+張る]
- 09) きばゆり（鹿児島）[気+張る]
- 10) きばる（秋田・山梨・長野・岐阜・三重・滋賀・京都・鳥取・岡山・徳島・高知・長崎・熊本・大分・鹿児島）[気+張る]
- 11) きばるん（沖縄）[気+張る]
- 12) きまる（福岡）[気+張る]
- 13) ぎんばる（山形）[気+張る]
- 14) くんばゆん（沖縄）[気+張る]
- 15) けっばる（北海道・青森・岩手・宮城・秋田・栃木）[気+張る]
- 16) けばる（青森・秋田）[気+張る]
- 17) ごいせーきる（静岡）
- 18) しこる（東京・三重・奈良・和歌山・香川・高知）
- 19) しちこたえる（島根）
- 20) すこだる（島根）

- 21) すねこぼる (島根) [(不明)+張る]
- 22) せーぎる (長崎)
- 23) せーばる (長崎) [情 (?)+張る]
- 24) せーふる (秋田) [情 (?)+張る (?)]
- 25) せぎる (愛媛)
- 26) せばる (山口) [情 (?)+張る]
- 27) ちばゆい (鹿児島) [気+張る]
- 28) ちばうい (鹿児島) [気+張る]
- 29) ちばゆん (沖縄) [気+張る]
- 30) ねきばる (山形) [気+張る]
- 31) のってでる (岐阜)
- 32) はかむ (青森)
- 33) はぎりかむ (富山)
- 34) はをかむ (大分)
- 35) ふごむ (青森)
- 36) ふぐむ (青森)
- 37) へばりつく (栃木) [へ+張る]
- 38) へばる (新潟・鳥取・島根・岡山) [へ+張る]
- 39) へんばる (石川) [へ+張る]
- 40) やっぱゆん (沖縄) [(不明)+張る]

もっとも使用地域が広い10)「きばる」は、「気+張る」という語構成である。北海道から東北各地で見られる15)「けっぱる」も、音が異なるものの、「気+張る」の語構成である。このように上記の例をみると、40例中25例が「～+張る」の語構成である。これらのことから、「頑張る」は「～+張る」であることが分かるが、2つの語源説のいずれもが「張る」を含んでいるので、ここからは語源に関して何ら新しい知見を加えることはできない。

しかし、その「張る」の前に来る語をみると、後者の語源説「我(に)張る」の「我」に近い意味を有する語彙が並んでいることに気づく。例えば、07)から13)の「き～」は「気」であると容易に想像がつくし、15)16)の「け～」も「き～」の音が母音交替しただけで、語彙的には同じであろう。23)および26)の「せ～」は、「性(せい・しょう)」あるいは「精」ではないかと考えられる。すなわち、今日の語彙で表現するならば、「気持ち」あるいは「気力」といったニュアンスになるだろう。

また、ここにはあげられていないが、青森や岩手などで、強情を張ることや、意地を張ること、またそのような人のことをさす「じょっぱり」【情張】も、「情」+「張り」であり、同じ語構成である。

以上のように、「気持ち」あるいは「気力」を「張る」という語構成が、「頑張る」という意味の方言として、多くの地域で残っているということになると、共通語の「頑張る」も方言と同様の語構成であるとみるのが自然である。

上記の考察から、後者の語源説である「我」を「張る」と理解したほうが語源としては妥当である蓋然性が高い。

また、後者の語源説は、「我」と「張る」との間に、助詞「に」があると想定している。これ

は「頑張る」が「が+ん+はる」という音の構成であることを説明するためであろう。すなわち、「ん」の音を説明するために、助詞「に」(ni)がそこにあるのだという考え方である。

しかし、「がんばる」は「がはる」から出来上がったと考えてもなんら破綻はない。有声両唇破裂音である「ば (ba)」が発音される場合、前鼻音化現象が発生し、baの前にmの音が挿入されることがある。すなわちmbaという音がそこに生み出されるわけである。baのまえに「m(ん)」の音が挿入されれば、「がばる」は「がんばる」となる。あえて「我」と「張る」の間に助詞を想定しなくても問題はないし、「～に張る」という表現が他に見られないことから、助詞の「に」を想定することは妥当ではないといえる。

共通語の「がんばる」のみならず、方言のなかにも同様の現象が見られる。38)「へばる」と39)「へんばる」は、同じ語源と考えてよいだろう。前者に「ん」が挿入されたのが後者「へんばる」である。これはまさに「はる」の前に「ん」が挿入された例である。このように、同じ語構成である状況下で同様の現象が起きたのである。

このように見てくると、「頑張る」の語源は、2つの語源説のうち、後者の「我+張る」である可能性が高いと結論することができる。

2.3. 他言語との比較

上記のとおり、「頑張る」の語源は、その構成と日本語の方言から「我張る」であると結論することができた。次に、「頑張る」の意味について検討したい。「頑張る」は、日本語以外、たとえば英語ではどのように表現されるのか。外国語との比較検討から「頑張る」の意味の混在について検討したい。

たとえば、私たちにとって、もっとも馴染みのある外国として英語の例を見てみよう。日本語の「頑張る」の訳語にはどのような語が与えられているか。まず、あげられるのは、

・ Good Luck !

である。あえて直訳するなら「幸運を！」ということになる。日本語環境であれば「頑張れ！」が用いられる状況であろうが、「頑張れ！」という語の訳語としては、まったく相応しくない。日本語の「頑張る」の中心的なニュアンスを含んでいない。日本語の「頑張れ！」は、自分の力でなんとかしようと歯を食いしばれという意図を感じさせるが、英語の“Good Luck!”にはまったくない。自力達成ではなく、他力本願的なニュアンスである。しかしながら、英語のネイティブ(本学文学部英語英米文学科教員のJohn McLean氏)によると、“Good Luck”は、もっとも一般的であり、誰にでも使うことができる。日本人が「頑張れ！」あるいは「頑張ってください！」と発するようなシーンで使用されるもっとも一般的な例であるとのことであった。また、

・ Take it easy !

というフレーズも「頑張れ！」の使用状況で用いられるので、「頑張れ！」の訳語ということになるだろうが、これまた「頑張れ！」のもつ困難にじっと堪えてというニュアンスとは反対の表現となっている。

これらの用例がある一方で、「頑張れ！」の訳語として、

・ Do your best !

もある。この語のほうが日本語のもつ「頑張る」のニュアンスを有しているように感じる。日本人が「頑張る」を英訳する場合、このフレーズを選びたくなる。しかし、この語は英語ネイティブによれば、目下の者に対してはともかく、目上の人を使用するのは失礼に当たるとのことだった。理由は、目上の人に対して命令するようなかたちになるからであるとのことであった。逆に、たとえば教師が学生に向かってこの語を発することはできるらしい。

また、「頑張る」ということは、“best”，すなわち「最善」を尽くすということなのかということと少々疑問が残る。最高のパフォーマンスをみせろというのではなく、ともかく現状を乗り切れといったような、むしろ消極的な意味合いが「頑張る」にはある。自分の力をいかんなく発揮して、最高のパフォーマンスを実現するという意味はそこにはない。

「頑張る」の訳語として、上記2例の他に、

・ Hang in there !

がある。直訳すると「そこにぶら下がれ！」という意味になる。意識すると「そこでじっと堪える！」という意味になろうか。これが日本語の「頑張れ！」にもっとも近いニュアンスではないだろうか。嫌かもしれないが、その状態を維持しろという意味であり、その意味には、その状態を続ければ、その先にきっと良いことがあるからということになるだろう。

その他にも、

- ・ Keep it up !
- ・ Don't give up !
- ・ Keep fighting !

などがある。これらは、“Hang in there !”に近い。

上記は、他者に対して発する「頑張る」(「頑張れ！」)であったが、これを自分自身に対して使用する場合、どのような表現がなされるのか。

「一生懸命に頑張る」というニュアンスであれば、“be tenacious”や“persistent”など、容易に諦めないという語に置き換えられる一方、「さかんに行動する」というニュアンスであれば、“be full of energy”といったフレーズに置き換えることができるようである。

日本語の「頑張る」について、他言語(英語)との比較によって、その内包する意味を明らかにしようという試みから分かることは、日本語の「頑張る」には、少なくとも2つのニュアンスが含まれているということである。1つは、「困難に対してじっと堪えて容易には諦めず、それを継続させる」といったもので、もう1つは、「自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する」というものである。前者は、“hang in there !”であり、“tenacious”あるいは“persistent”であろう。後者は、“do your best !”であり、“be full of energy”であると言えよう。英語ではこれら別々の語や語句であるものが、日本語においてはひとつの語「頑張る」に混在していることがわかる。

したがって、日本語の「頑張る」は、「耐える」という意味と、その反対の意味「発揮する」、

とを共存させていることになる。本論冒頭の「頑張る」に対する問題点は、ここにあるといえる。

3. 「頑張る」の多様な意味と不在

日本語の「頑張る」には、2つの意味が混在していることが分かった。ものごとに対して一生懸命に努力するという点では同じではあるが、その努力の仕方に違いがあるというわけである。さらにいえば、それは、心理的な部分での違いである。

まず、従来の「頑張る」の意味を再度確認しよう。「頑張る」は、先に以下の2つの意味をもっている結論した。

- a) 自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する。
- b) 困難に対してじっと堪えて容易には諦めず、それを継続させる。

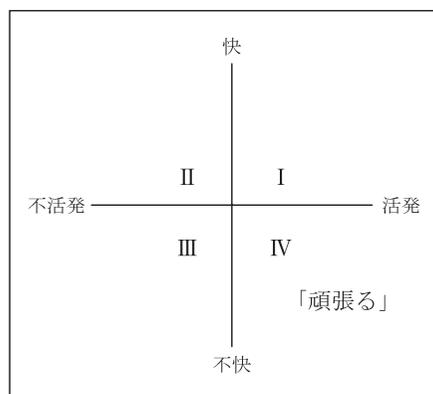
a)は、「頑張る」における「行動」の意味要素である。行動の値は、活発か活発でないかで表すことができる。目標達成のために活発に活動するという意味をもつことから、この語の意味要素は、行動（行為）として<活発/不活発>という基準でいうならば、<活発>の値を取るといえる。

b)は、「頑張る」における「心理」の意味要素である。目標達成のために困難に対してじっと堪えるということから、この語の心理的な意味要素は、<快/不快>という基準でいうならば、<不快>の値を取るといえる。

いわば、<活発>と<不快>が、従来の「頑張る」という語の意味構造である。

「頑張る」という語に、上記のとおり、2種4項が与えられた。これをデカルト座標系で表してみよう。すると以下のようなになる。

図表1



X軸に、行動の値<活発/不活発>をとり、Y軸に、心理の値<快/不快>をとる。この座標系において、従来の「頑張る」は、第4象限（IV）に位置することになる。すなわち、第4象限は、「頑張る」である。

「頑張る」における、この座標系のその他の象限は、どのようなものになるのか。

第3象限（III）は、<不活発>であり<不快>であるという状況である。これは、本論の冒頭

においてもあげたように、鬱病などで、行動を起こすことができない、さらに、その気力もおきかないといった状況であろう。いうなれば、「頑張れない」という状況である。ものごとに対して行動を起こさず、そのものごとに対して魅力も関心も感じず、したがって、その行動を起こすことがない状態に不快感を覚えるという状況である。この状況は、第4象限の苦しさとはまた異なる苦しさ（不快）であろう。第3象限は、「頑張れない」である。

第2象限（Ⅱ）は、＜不活発＞ではあるが、＜快＞であるという状況である。一見、相反する状況は、どのように解釈されるのか。「自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する」ことはなく、「困難に対してじっと堪えて容易には諦めず、それを継続させる」こともない、状態である。

辻秀一2009は、このような状態を『新「根性」論』（毎日コミュニケーションズ）のなかで、「偽根性」と呼んでいる。

「最近ではストレス社会を生き抜くために、つらい状況に自分がいても、自分の置かれた状況を深く考えなかったり、それとは向き合えなかったりする人が増えています。（中略）何より問題なのは、パフォーマンスに興味がないことであり、その状況での最適・最高のパフォーマンスなど発揮するつもりは毛頭ありませんし、しんどくなるので、結果や目標に対するコミットメントはしません。」(p54-56)

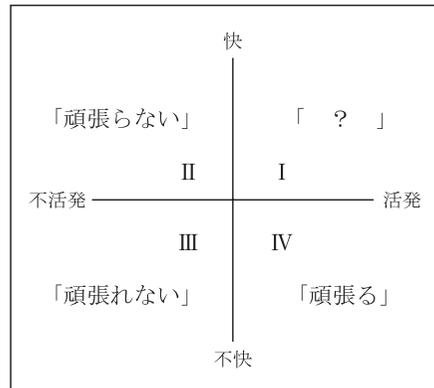
すなわち、辛いことはしたくない、楽でいたい、という状況である。いったん行動を起こせば、かならず乗り越えなければならない課題や問題は発生するし、当然安穏な状態ではいられないだろう。だから、何もしないでいる。そういった状況である。頑張っても頑張れないが、辛いことは避けたいから、頑張らない。これはまさに、第2象限の＜不活発＞かつ＜快＞という状況であるといえよう。第2象限は、「頑張らない」である。

最後に、第1象限（Ⅰ）は、何か。行動において＜活発＞であり、心理において＜快＞である状態である。結論からいえば、「頑張る」という語においては、表現し得ない状況である。なぜなら、第1象限は、b)の意味を否定するところに存在理由があるからである。

しかし、従来、この第1象限である＜活発＞かつ＜快＞である状況を、第2象限と同じ「頑張る」で表現してきた。違和感が生じて当然といえよう。

ここまでを先の表にまとめると、以下のようになろう。

図表2



4. おわりに ～「頑張る」を超えて～

従来、第1象限は、本論の冒頭にあるように、「楽しむ」と表現される場合があった。しかし、「楽しむ」は、b)「困難に対してじっと堪えて容易には諦めず、それを継続させる」を打ち消すことができても、a)「自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する」は表現し得ない。だから、本論冒頭のエピソードのような「楽しんできます」などというスポーツ選手には、甘さを覚えることになる。より率直に言うなら、勝負する前から、負けたときのための言い訳をしているような印象すら抱いてしまうのである。

したがって、現在、日本語は、第1象限にふさわしい語をもっていない。違和感を覚えつつ「頑張る」を使うか、違った意味で違和感を覚えつつ「楽しむ」など他の語を使うか、あるいは、何も感じないで「頑張る」を使い続けるか、しかない。

心理学者ミハイ・チクセントミハイ氏の理論に「フロー理論」というものがある。「フロー状態」とは、いわば、我々がものごとに対して自然と没入していき、そして無我夢中になっている状態において活発な行動がなされ、その結果好ましいものごとが生起する、といったような状態をさす。第1象限は、まさに「フロー状態」ということができる。

繰り返しになるが、日本語は、概念が先行しそれに言葉が追いつかないという、もどかしくも希有な経験をしているといえる。このことは、言語のありかた、あるいは言語とそれを使用する言語主体との関わりについて、多くの示唆を与えてくれている。第1象限のフロー理論のごとき状態を表す語が自然発生するのを待つか、あるいはそれを作り出すべくムーブメントを起こすか、である。言語そのものにルールとして何がしかの力を加えるのは妥当ではないと考える。しかし、そこには何かを意識することは重要であると考えている。

参 考 文 献

- ・ M. チクセントミハイ [Mihaly Csikszentmihalyi] (著), 今村浩明 (訳) 『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社, 1996年
- ・ 江端義夫・本堂 寛・加藤正信 『全国方言一覧辞典』学習研究社, 1998年
- ・ 小学館国語辞典編集部 『日本国語大辞典 第二版』小学館, 2001年
- ・ 渡邊敏郎・E.Skrzypczak・P.Snowden 『新和英大辞典 第五版』研究社, 2003年
- ・ 佐藤亮一 (監修) 『標準語引き日本方言辞典』小学館, 2004年
- ・ 新村 出 『広辞苑 第六版』岩波書店, 2008年
- ・ 辻 秀一 『新「根性」論「根性」を超えた「今どきの根性」』毎日コミュニケーションズ, 2009年

[2010. 10. 4 受理]